1 月第 2 週の礼拝説教

■日　時：2024 年 1 月 14 日（日）10：30～11：30　降誕節第 3 主日礼拝
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「 母の胎内にあるときから 」
■聖　書　新約：ガラテヤの信徒への手紙 1 章 11～24 節（新約 p342～343）
■讃美歌：280「馬槽のなかに うぶごえあげ、 」
　　505「 歩ませてください、真実求めて 」

先週の 1 月 10 日木曜日の夕方に、前任地の福島荒井教会と関わりのある方から、1 月 9 日（火）に教会の役員でもあり、関連の認定こども園の理事長でもある方が亡くなられたというお知らせを受けました。ご葬儀の日程などはわからないということでした。関係者にお尋ねの電話をしようと考えたのですが、おそらく、こども園のホールでご葬儀かもしれないと思い、こども園を全く休園にするということはできないだろうから、教職員の方々は大変なことになっているだろうと想像し、連絡を取らずに祈っておりました。その後、園長先生から連絡が入り木曜日に前夜式、金曜日にご葬儀ということでした。いずれにしても、今の私の体力ではとても金曜日のご葬儀に福島までは行けませんでした。私よりも若い方でしたので、とても残念で心が沈みました。昨年の 12 月半ばぐらいに、夫人からお便りをいただきました。余命を宣告されている中でしたが、ご夫妻で「最後の日まで、涙を流さず、一緒に楽しく過ごすことができればいいな、」と考えておられたようです。それを受けて、私がお出ししたクリスマスカードへの返信のカードには、ご本人の字で「主の御名を賛美いたします。共にイエス様の御降誕をお祝いいたしましょう。」とありました。消印を見ましたら 12 月 17 日になっていました。12 月初めから入院しておられたそうですが、12 月 15 日に退院されたそうです。それは、翌日 12 月 16 日（土）にこども園のクリスマス会があり、お孫さんのオペレッタをどうしても見たいという願いがあったからだったそうです。当日は車椅子でいつものようににこやかにご覧になっていたと聞きました。最後は、病院には戻らずご自宅でご夫人と共にお過ごしになったということです。私は今、ご葬儀に出席できなくてよかったと、思っています。なぜなら、私の思い浮かべるのは、福島荒井教会を去るときに見送ってくださった元気な姿であり、一緒に入園式や卒園式などで並んでいた時のことだからです。

そして昨夜は、先週の礼拝でお話ししたエフェソの信徒への手紙 2 章 10 節の「わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。」という御言葉を噛みしめておりました。尤も、その御言葉を口語訳で「わたしたちは神の作品であって、良い行いをするように、キリスト・イエスにあ

って造られたのである。神は、わたしたちが、良い行いをして日を過ごすようにと、あらかじめ備えて下さったのである。」とくり返していたのですが。新年の最初の主日の1月7日に、エフェソの信徒への手紙2章1節以下に先立つ「死から命へ」という見出しに出会い、その素晴らしい命への転換は、「自らの力によるのではなく、神の賜物です。」と語りかける御言葉に出会いました。一人の信仰者が天に召されていかれたという現実のなかで、その御言葉を反芻するときに、これから受難節までの数週間は、私たちは主なる神様から多くの賜物をいただいたのですから、それを生かしてどのように歩んでいけばよいのかをご一緒に考えたいと思いました。それは、私たちが神様の呼びかけにどのようにお応えしていけばよいのか、と言い換えることもできます。そのような観点から、主の日ごとに与えられる御言葉に聴いていきたいと考えています。

その一つ目が本日の聖書箇所、ガラテヤの信徒への手紙1章11節から24節です。11節では「兄弟たち、あなたがたにはっきり言います。わたしが告げ知らせた福音は、人によるものではありません。わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。」と記されています。エフェソの信徒への手紙に記されている「神の賜物」を言い換えるとすれば、ガラテヤの信徒への手紙では「イエス・キリストの啓示によって知らされた」ものと語られていると思います。この箇所は、ガラテヤの信徒への手紙1章1節の表現に似ています。著者である使徒パウロは、「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストとキリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ」と最初に自分自身の立ちどころを宣言して、人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって福音を知らされた者としての姿勢を明らかにしているので、その生きざまが手紙全体を通して流れているように思います。

ガラテヤの信徒への手紙の著者である使徒パウロは、15節で「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」と記しています。この箇所を読むと、私は旧約聖書のエレミヤ書を思い出します。主なる神様は若者エレミヤに、

「わたしはあなたを母の胎内に造る前から
あなたを知っていた。
母の胎から生まれる前に
わたしはあなたを聖別し
諸国民の預言者として立てた」

と語りかけられました(エレミヤ書1章5節)。使徒パウロは、もともとは熱心なユダヤ教徒で、私たちの持っている聖書では旧約聖書にあたる部分ですが、その聖書に精通していました。彼は自身の出自をフィリピの信徒への手紙3章5節,6節で次のように記しています。「5 わたしは生まれて八日目に割礼

を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、6 熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。」そのようなパウロですから、エレミヤ書を十分に踏まえたうえで、「自分は異邦人に福音を告げ知らせるために、母の胎内にあるときから選び分けられていた」と語っているはずです。彼は、イエス・キリストに出会いその啓示を受けたそのときに、神様によって選び分けられたと述べるのではなく、母の胎内にあったときから選び分けられていたと言うのです。ある方は、このことを次のように解説しています。「パウロがこのように記すのは、イエス・キリストの啓示を受ける前の人生も決して無駄ではなく、異邦人に福音を告げ知らせるための準備であったと考えたからです。かつて律法に人一倍熱心であり、教会を迫害し、滅ぼそうとしていたパウロであるからこそ、語ることができる福音の豊かさがあるのです。私たちは、パウロのように、栄光の主イエス・キリストを肉の目で見たことはありません。しかし、私たちがイエス・キリストの福音を信じることができたのは、究極的に言うと、御言葉と共に働く聖霊において、栄光の主イエス・キリストが出会ってくださったからであるのです。そして、私たちも、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるために、母の胎内にある時から選び分けられていたと言えるのです。高齢になってからイエス・キリストを信じた人であっても、母の胎内にあるときから神様によって選び分けられていたのです。そのことを信じるとき、私たちもイエス・キリストを信じる前の人生を、意味あるものとして、神様の御手から受け取り直すことができるのです。」 ひるがえって、私たちが今、このように生かされていること、それは私たち自身が全く自分自身を認識していないときから、私たちに先立って私たちをご自分の御業のために選んでくださった方の恵みによる、という福音を信じることができたなら、私たちには全く新しい世界が開けてくるはずです。